

いの流水俳壇

松尾 満津於 選

「当季雑詠」

「伊野大国様秋祭り献句俳句会」

秋灯や遺影は膝に文庫本

井上 郁子

(評)その土地で生まれ育った記憶からの俳句であろう、落ち着きを見せた句である。集落に点在する家からの光がきらめいている。昼の仕事から解放され、諸事万端が片付いた、農家の主婦、心身共に休まる一と時、膝の上の遺影は作者にとって忘れる事のない、身近な存在だった人、蘊蓄を傾けた句である。

千枚田一色となる豊の秋

刈谷 志津

(評)一見して平凡に見えるが、自然観照は澄み切っている。無駄がない。何よりも収穫のよろこびがあり、心の安らぎがある。段々に続いている棚田の色が、空間と時間を含んで一斉に黄金色に変わる。「豊の秋」は確かな俳句の格。

旅夜秋の言の葉拾いつつ

大川 節弥

(評)秋の旅である。風土に徹して風土を越えたとき、真の意味の風土性が生まれるとするならば、この句は一つの典型、ことに「つつ」は作者の自然に対する凝視と、その慈眼、秋という言葉の中にはどんな事象が存在するだろうか、それを覚ったとき、旅の目的が果される。作者の自然に対する心根を見落としたくない。

爽やかな紙の館の土蔵造り 竹崎 光子

月の浜埃しづめの雨となる 間 浩太

無消毒のラベルの表示トマト買う 友草 水月

疵だらけの机に月を祀りけり 岡本とも子

式部の実しんじつ零れやすきかな 植田 紀子

空まぶし踊るすすきのリズムよし 筒井 正子

秋風と夏風交差街の辻 竹崎たかひろ

秋風や生まれし我家消えてゆく 森岡 照月

曼珠沙華燃え今生の浄土めく 津田 久美

水澄むや静々進む神の鯉 川村 博子

父母健在それだけでよし盆の故郷 松尾満津於

ちんちろりん磧の石のまだぬくし 駒木 基克

雨音の失せたるのちの萩月夜 東谷 晴男

風澄みて水澄みにけり紙の町 山本 呆齋

みず澄んで漉業手業老ふたり 安藤 沖石

姉妹とは老いてなほよき実南天 鎮西 美緒

秋風や流れの中の水えくぼ 島村かりん

月の夜は天女の衣漉いており 大西 昇月

新涼や佛飯運ぶ足の裏 橋詰登志子

投網の宙にひろがり晚霞光 橋本 幸明

秋風の綾と流るる仁淀かな 島田 瞳

以上 伊野大国様俳句大会 出席者

投句関係

山の形暮れてなほあるそばの花 伊藤 萩甫

秋の声ゆらゆら蝶の静けさに 広瀬うき子

秋刀魚焼く匂い漏れ来る山の里 野本 則昌

次 題 「当季雑詠」
締め切り 毎月第2月曜日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月の子ども川柳

ありがとう いも伝える あいこば

川内小4年 金田 莉音

(評)ありがとうと素直につたえな

い大人たち、教えられる。

よだれ出そう マツケ見たら おなかすく

川内小3年 矢野さとし

(評)食欲の秋、特に高価なマツタケ、よだれも出ます。

けんかして なみなおして 笑います

川内小3年 伊藤 栞菜

(評)明るい子どもらしさが嬉しい。

せいでんき 悲しいときは 心にも

川内小4年 金子明香里

(評)大人顔負けの感性、表現が素敵!

なりたな すごく仲い 友達に

下八川小5年 柿内 大貴

(評)大人の世界にも伝えること。が伝わる。

おんだん化 地球を守ろう みんなをね

下八川小4年 筒井 敦也

(評)現代社会に育つ子どもの実感が伝わる。

※「こども川柳」は町内全小

学校の児童のみなさんをお

象に募集しています。次回

提出締め切りは11月19日

(金)です。たくさんのみな